

《トリスタンとイゾルデ》

をハッピー・エンディングで終わらせるには？

2022/07/24



先の名古屋モーツァルト協会の講演で、「悲劇は10分前に終わった喜劇」と題してお話をしました。「物語はすべて喜劇であって、悲劇だと言われるものは、あと10分で喜劇的に終わるのに最後の部分をカットしたからだ」というのが私の講演の結論です。水谷康男会長をはじめ、仲の良い会員のみなさまには好評でした。これが、友情というものです。

その日、お聞きになったNHKの講座の方から、「では、ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》も喜劇なのですか？」というご質問がありました。ちょうどいま、NHKの土曜講座でワーグナーの《トリスタン》を観ているからです。悲劇の愛の物語の中でも、もともとはケルトが起源といわれ、中世になって宮廷詩人たちによって広く語り伝えた『トリスタンとイゾルデ』は、古くから愛されてきた人気の「最高の悲恋物語」です。特に、ワーグナーの楽劇では、トリスタンとイゾルデは二人とも、最後には、折り重なって死ぬですから、悲劇中の悲劇です。「でも、この死ぬことによって二人は愛に生きることが出来たのですから、むしろ、喜劇です」と言ってみたものの、どうも説得力がありません。「果たして、ワーグナーは、私の『《トリスタン》喜劇論』をどうおもうだろうか？」と心配になりました。

ワーグナーへの手紙

それで、ワーグナーに手紙を書くことにしました —

前略 いまの世の中、悲劇が多すぎます。願うことなら、私たちの人生は幸せいっぱいであってほしいものです。人は、悲劇よりも喜劇を望むものです。あなたの楽劇《トリスタンとイゾルデ》も、ぜひ、喜劇で終わらせてください。もともと二人を不幸にしているのは、イゾルデがマルケ王のお妃であるからです。二人を幸せにするには、マルケ王が、イゾルデをトリスタンにゆずればいいのです。マルケ王も、二人が不倫を働いたのは「媚薬」のせいであったことを認めているのですから、話は簡単だとおもいます。親族や貴族や部下たちや国民やアイルランドがどう言おうとも、まあ、メロートだけは反対するでしょうが、国王が決めれば良いことです。トリスタンが、メロートの剣に、みずから身を投げたのは残念でした。早まったことをしたものです。でも、闘って切りつけられたわけではないので、イゾルデの薬で治ることでしょう。

ワーグナーからの返事

ワーグナーから、返事が来ました。

お手紙ありがとうございます。私もそう思ったので、第3幕で、イゾルデを追ってトリスタンのところへやって来たマルケ王に、次のように言わせることにした。【NHKの土曜講座の資料76頁参照】

マルケ王

私が愛するお前たち二人が、薬のせいで愛し合い、二人が無実であることを知った私は、なんとうれしかったことだろう！ このかわいい男にお前を嫁がせようと、飛ぶようにお前を追ってきたのだ。

だが、時代を代表する最高芸術家であり、芸術の革命家である私には、歴史と文芸とオペラの伝統と未来に責任があるのだ。古くからの悲劇の悲恋物語を、そうは簡単に喜劇にするわけにはいかない。それは、その時代への「精神」があるからだ。このトリスタンとイゾルデの時代は、中世なのだ。騎士道精神が「世界精神」だった時代なのだ。騎士道精神とは、「礼儀と正義」を守ることだ。なによりも、「礼儀と正義」が尊ばれる。マルケ王がこの不倫の二人を許したとしても、当時の時代精神、すなわち、世間は、礼儀と正義に「悖る」（もどろ:そむく・反する）二人を許さないだろう。しかたなく、イゾルデの治療が手遅れであったことにして、二人は死ぬことになったのだ。

「物語」の結末

物語『トリスタンとイゾルデ』の最後は次のようになっています —

[それまでコーンウォールの居城にいた] マルク王は恋人たちの死を知ると、海を渡ってブルターニュにきたり、イゾルデのためには玉髄(ぎょくずい)づくりの、トリスタンのためには緑柱石の、二つの死棺を造らせた。王はこの可憐な二つの屍を、船に乗せてタンクジュルに運んでいった。そこで、御堂の後陣のほとり、右と左にしつらえた二つの墓にそれを納めた。けれど、夜のあいだに、トリスタンの墓からは、濃い緑色の薬の茂った一本の花かおるいばらが萌えて、御堂の上にはいあがり、イゾルデの墓のなかののびてゆくのであった。

コーンウォールの人々はそれをたち切った。けれど翌日ともなれば、同じ色濃い花かおる勢いの強い新芽がのびて、黄金の髪のイゾルデの墓にはってゆく。三度人々はそれを切ったがだめである。そこで人々は、このよしをマルク王の耳に達した。するとマルクは、その枝を二度とたち切ることを禁じた。

【『トリスタン・イゾルデ物語』岩波文庫 268頁】

正義よりも真実を

でも、二人の愛は、王さまや騎士たちに無礼であっても、また、世間に対して不正義であっても、「真実の愛」です。二人は、世間体の礼儀や正義よりも、時代を越えた「愛の真実」を求めたのですから、ワーグナーの「時代精神の主張」は、時代後れで、間違いです。ここでのワーグナーは、マルクスやダーウインのような革命家ではありませんでした。二人の愛は、暗黒の中世に、新しい人道主義のルネサンスの光を当てることだったのです。二人の愛は、真実の愛を語り、新しい時代精神を示すものだったのです — と私は思います。



従って、楽劇《トリスタンとイゾルデ》は —

イゾルデの秘術によってトリスタンの傷は癒えて元気になり、トリスタンとイゾルデとマルク王とクルヴェナールとブランゲーネと、この際、メロートも加えましょう、共々、幸せに暮らしましたとさ。

といった喜劇《トリスタンとイゾルデ》となって、広く許されていていいでしょう。それで、今回、イゾルデは、幕引きで、「愛の死」は歌いません。これは、残念です。

都築正道